

おもしろノート

多摩の野鳥たち 6

国松 俊英



イラスト・望月 聖子

一年中見ることのできる鳥ですが、昔は「山の鳥」でした。春から夏の間、山の林で子育てを

「ヒヨドリ」は、家の周り、公園、林などで一年中見られる鳥です。木の実が好きで、モチノキ、センダン、ナナカマド、ヌルナなどの実を食べます。庭にあるナンテン、ウメモドキ、ピラカンサの実も喜んで食べ、甘い物も好きです。熟れた柿の実を食べたり、ツバキの花の蜜を吸ったりします。

「ヒヨドリ」は、家の周り、公園、林などで一年中見られる鳥です。木の実が好きで、モチノキ、センダン、ナナカマド、ヌルナなどの実を食べます。庭にあるナンテン、ウメモドキ、ピラカンサの実も喜んで食べ、甘い物も好きです。熟れた柿の実を食べたり、ツバキの花の蜜を吸ったりします。

ヒヨドリ



藤富 敦郎さん撮影

開発で山追われ「平地の鳥」に

して、秋になると一部が温かい平地に下りてきて生活してしまっている。そんな習性に変化が見られたのは、いまから40年前のことです。1968年の夏、東京都内でヒヨドリの姿が見られなくなった。病気で山に帰れない鳥だると鳥の研究者はいいます。

た、それが1、2年後から、都内だけでなく多摩地方の田野、府中、福生でも見られるようになったのです。69年には府中市でヒヨドリの幼鳥が発見され、70年には文京区の小石川植物園でも幼鳥が見つかりました。山で巣を作りひなを育てる習性

ずっと昔から持っていた習性を短い間に変えてしまい、平地の鳥となったヒヨドリの埋（たぐ）くましさに驚いてしまいます。ヒヨドリは飼いならずと、他の鳥の鳴き声をまねたり、そばで笛を吹くといった声で答えるといひます。それで平安時代には、ヒヨドリを飼うのが流行しました。江戸時代になってもヒヨドリを飼うのは盛んでした。

たのです（いまは許可なく野鳥を飼うことはできません）。百閒は、ヒヨドリも飼っていました。長い間飼って、とても愛着がありました。初夏の夜、百閒は家族と畜舎に出かけました。ヒヨドリの鳥籠は、玄關の三和土（たたき）に置いておきました。帰ってくる時、三和土には血が流れ、籠の中ではヒヨドリが血を流し、羽を散らして死んでいました。三和土には血を踏んだ猫の足跡がいくつも残り、床下に消えていたのです。

夏目漱石の弟子で、内田百閒（ひゃっけん）という小説家・随筆家があります。黒澤明の遺作映画「まあだだよ」は、百閒の日常生活と彼の教師時代の教え子との交流を描いたものです。その百閒は、小鳥を飼うのが好きで、ウグイス、カワラヒワ、メジロ、ホオジロなどいろいろな鳥を飼っていました。随筆の中で自分のことを、「阿呆の鳥飼」と呼んでいるくらいです。大正から昭和の初め頃は、野鳥の飼育は法律で禁じられていなかった

る野良猫を待つて、突き殺してやろうと思っていました。百閒は、飼鳥も家族の一員のように愛していたのですね。（児童文学作家・日本野鳥の会会員 町田市在住）

性のヒヨドリは、60年代の終わりに山から下りてしまい、「平地の鳥」になってしまったのでした。

山の鳥がどうして平地の鳥になったのでしょうか。原因のひとつとして考えられるのは、60年代に山で木がどんどん伐採されたことです。そしてスギやヒノキの植林が大規模に行われました。こうした大きな開発がヒヨドリを山から追い出したと考えられます。ヒヨドリは生きのびるために山から平地に下りて、そこに棲みつくように習性を変えていったのです。

伊豆諸島の漁師たちは、十月頃の晴天で海が穏やかなることを「ひよりの風（なぎ）」といいました。そうした日には、ヒヨドリの大群が海面を飛ぶようになって南に向って飛んでいったそうです。今でもタカの渡りで有名な愛知県伊良湖岬に行けば、群れになって海上を飛んでいくヒヨドリを見ることが出来ます。

地名・気象に渡りの名残 かつてヒヨドリは、春から夏を山地で過ごし、秋に山から下りて温かい土地へ渡っていくまじ道で「鴨越（ひよりのこえ）」と呼びました。そこは春と秋にヒヨドリが渡っていく場所になっていたから、その名前がつけられたのです。

伊豆諸島の漁師たちは、十月頃の晴天で海が穏やかなることを「ひよりの風（なぎ）」といいました。そうした日には、ヒヨドリの大群が海面を飛ぶようになって南に向って飛んでいったそうです。今でもタカの渡りで有名な愛知県伊良湖岬に行けば、群れになって海上を飛んでいくヒヨドリを見ることが出来ます。

伊豆諸島の漁師たちは、十月頃の晴天で海が穏やかなることを「ひよりの風（なぎ）」といいました。そうした日には、ヒヨドリの大群が海面を飛ぶようになって南に向って飛んでいったそうです。今でもタカの渡りで有名な愛知県伊良湖岬に行けば、群れになって海上を飛んでいくヒヨドリを見ることが出来ます。